「女の平和」より「男の浮気」

ヨハン・シュトラウスとウィーン会議

― オペレッタの時事的な面白さ ―

パリの喜劇とウィーンの喜劇

いま、ＮＨＫの春期の木曜講座Ｂで、「オペレッタ特集」を組んでいます。まず、パリのオッフェンバックの「オペラ・ブフ」（喜劇的作品）の《パリの生活》と《ジェロルスタン大公妃殿下》から始めました。オッフェンバックのオペラ・ブフは、「風刺」が効いた物語と皮肉な会話と軽妙な歌と親しみやすい音楽が主で、そこに、華やかなバレーや技巧的なダンスが加わった「レビュー」（仏: revue）や「バーレスク」（仏: burlesque：あざけり・からかい）やスカートを上げる「カンカン」まで見せてくれます。そして、ウィーンのヨハン・シュトラウスのオペレッタへと進み、歴史物の《ジプシー男爵》を観てから、いま、《ウイーン気質（かたぎ）》が始まりました。さすが、ウィーンです。上品なワルツやポロネーズが踊られて、とてもきれいで上品です。これもまた歴史物ですが、時事的な批判もあって、いま観てもとても面白いです。それで、ここでは、《ウイーン気質》についてその「オペレッタの時事的な面白さ」のお話をします。世紀末のウィーン人は、「女の平和」よりも「男の浮気」を選びました。　エッ、なんのことですって？

音楽は出来合いを使用

ヨハン・シュトラウスが活躍した 19 世紀後半、ウィーンでは７つの有名なオペレッタ劇場が競い合っていました。そのうちの一つカール劇場の支配人ヤウナーがヨハン・シュトラウス二世にオペレッタの作曲を依頼します。人気作曲家のシュトラウスは多忙で新作を作る余裕はありません。彼は、「今までに作曲したワルツやポルカなどの作品を使って台本を書いてもらい、新しいオペレッタにしよう」と提案しました。シュトラウスがこれまでに書いた名作ワルツやポルカなどの楽譜は箱一杯にあふれていました。宝の山です。新作《ウイーン気質》の台本は、後に「メリー・ウイドゥ」の台本を書くヴイクトール・レオンとレオ・シュタインが担当することになりました。例によって、ハチャメチャで、支離滅裂で、抱腹絶倒の舞台展開です。1899 年 5 月シュトラウスは宮廷歌劇場で歌劇《コウモリ》の序曲を指揮した後、気分が悪くなり帰宅して病いに伏せます。未完成のまま残された《ウイーン気質》の製作は、テアター・アン・デア・ウィーン劇場の指揮者アドルフ・ミュラー(ジュニア)が引き継ぎました。でも、やはり、「音楽」に作り付けの感があって、進行が少々熱気に欠けます。音楽とは怖いモノです。1899 年６月シュトラウスは亡くなり、《ウイーン気質》はまだ未完のままでした。

ウィーン人たちの人間性

死後、ミュラーによって完成された《ウイーン気質》は、カール劇場で初演されました。あまり受けず、初演後３週間で打ち切られました。でも、あんなにも流行ったワルツやポルカの総動員のオペレッタですから、大当たりしないわけがありません。テアター・アン・デア・ウィーン劇場が再演してからは、案の上、爆発的な人気が出ました。このヨーロッパの世紀末に、Ｊ.シュトラウスがこのオペレッタで「ウイーン気質」として示したかったのは、ウィーン会議において富国強兵をたくらむ各国の思惑をからかって、お金や地位や階級にとらわれない、浮気も含めて、すべてに寛容で粋な生き方こそ素晴らしいとするウィーン人たちの心意気でした。

堅物な田舎者の夫とさばけた妻

ときは 1815 年、まさに、ウィーンは、「ウィーン会議」(1814-1815)　の真っ最中。オペレッタ《ウイーン気質》の主人公は、プロイセンの小国のロイス＝グライツ・シュライツ国(架空の国)のツェドラウ伯爵バルドウインです。この国も、このウィーン会議に出席しています。その小国の出で、田舎者で、堅物で、元来融通の利かない真面目な伯爵が、快楽的なウィーン人に鍛えられて、次第に、陽気で、軽薄で、本物のウィーン子の血に燃える粋な浮気者に変わっていく「恋の遍歴物語」です。

伯爵のバルドウインと妻のウィーンの大貴族の娘ガブリエーレとは政略結婚です。粋で、陽気で、人付き合いの良いガブリエーレにとって、田舎者のバルドウインは堅物で、道徳的で退屈で、無愛想で一緒に居ても面白くも楽しくもありません。ガブリエーレは夫に「もう少し気楽に、だれとでも自由奔放にお付き合いなさい。浮気ぐらいしてもいいのよ」と教えますが、とは言っても伯爵はそうは急には変われません。あきれたガブリエーレは、早々に別居して一人郊外に住み、バルドウイン伯爵は街中のガブリエーレの両親の別宅に住むことになりました。

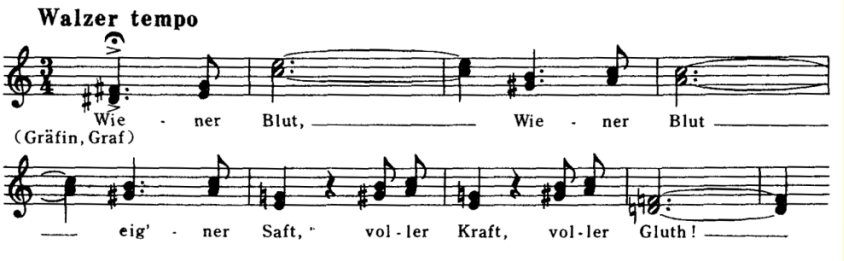
あまりにも妻にバカにされたので、伯爵はたくさんの女性と付き合うようになり、ついにはウィーンで一番の踊り子フランツィスカと恋仲になり、愛人として別宅に住まわせるようになりました。それに気づいたガブリエーレですが、自分が浮気を進めた手前、怒るどころか、あえて邪魔もしません。調子に乗った伯爵は、ついでに、奥方のご贔屓のドレス

メーカのお店のお針子にも手を出します。

「驚いたわ。あなたはとても変わった。厳格な堅物から、陽気で粋な浮気者になったわ。いまは愛人と暮らしているという噂よ。偉いわ」とウィーン人のガブリエーレは変な褒め方をします。
「だれがそんなことを。愛人がいるなどとそんな悪いことはしていないよ」と伯爵はあわてて、言い訳に懸命です。
「謝ることはないわ。これで、あなたは真のウィーン子よ。噂が本当でも、私は嬉しいわ。結婚したとき、一つだけ許せないことがあったの。私は生粋(きっすい)のウィーン子で、あなたは地方のロイツ･グライツ・シュライツの出身。この縁組みは最初から上手く行くとは思っていなかったわ。私はこのとうり奔放で快活、あなたは生真面目で厳格。あなたに欠けているものはなにか？　それは、ウィーン気質、すなわち、ウィーンの血よ」とガブリエーレ。
「結婚したてのあのころのぼくは、田舎出の無粋で生真面目な若者だった。君の奔放さに惑わされ戸惑っていたのさ。だから君が突然ご両親のところへ戻ったとき、家に一人残されてひどく怒ったが、そのとき、ぼくにはなにが欠けていたかが分かったのだ。それは、ウィーン気質、ウィーンの血だ」と伯爵。
「ウィーン気質、ウィーンの血、ウィーン特有の輝きと魅力に溢れている、このかけがえのない財産は私たちに活力と生き甲斐を与えてくれる」と二人は仲よく歌います。

それで、ここで、肝胆相照らした二人が歌うのは。このオペレッタの主題旋律の「ワルツ」です。

【ウイーン気質の主題のワルツ】



二　人	ウイーン気質、ウィーンの血。特有の魅力と輝きに満ちあふれている。ウィーンの血、このかけがえのない財産は、私たちを生かし、活力を与える。
ガブリエーレ	結婚したとき、あなたになにが欠けていたか、いまなら、分かるでしょう？でも、いまのあなたは、持っているわ。
伯　爵	なにを？
ガブリエーレ	ウイーン気質よ、ウィーンの血よ。
二　人	ウイーン気質、ウィーンの血。特有の魅力と輝きに満ちあふれている。ウイーン気質、ウィーンの血、美しいこの街で憩う安らぎ、ウイーン気質、ウィーンの血、どこにでも生きるこの言葉。

ウイーン気質とは

私(都築)、思うに ― ここで、このオペレッタの原題「ウイーン気質」(Wi ener Blut)、すなわち、「ウィーンの血」(Blut=血) の意味がはっきりします。すなわち、ヨハン・シュトラウスをはじめ、ウィーン人たちが作ったこのオペレッタは、良くも悪くも、「ウィーンこそが世界に冠たる文化都市であり、富国強兵などという野暮なものは捨てて、浮気にも階級にも寛容なウィーン人こそ最高の教養人で、大人の紳士淑女である」―という熱

烈な「ウィーン賛歌」なのです。すなわち、田舎出の偽貴族が、真の貴族になっていく成長物語がこのオペレッタ《ウイーン気質》なのです。

妻が夫の浮気を認め

でも、待って下さい。どこの国に、夫の浮気を奨励する奥方がいるでしょうか？

このヨハン・シュトラウスのオペレッタの「時と所」は、ナポレオン敗退後のウィーンです。ナポレオンによって徹底的に国土が破壊され、資源や資産を徹底的に分捕られた敗戦国の首領たちが、今度は戦勝国となって、一堂にあつまり、これまでの仕返しに、一度フランスに奪われた資源や土地や賠償金を、それ以上にして奪い返そうと開いたハゲタカ会議が「ウィーン会議」です。その強欲さに異を唱えたのが、当地ウィーンの人たちと音楽家です。ここで、各国が過分の仕返しをすれば、また再び、報復の戦争が起こります。ウィーンの人たちはそれを憂えたのです。「この際、過去のことは忘れて、喧嘩はやめて友だちになろう」というのです。それを、ガブリエーレの言葉、「世の中、真面目な律義さよりも、奔放で快活の方がいい」のです。「浮気された女の友だち同士で喧嘩したりいがみ合ったりするよりも、多少のことがあっても、仲よくする方がいい」といっているのです。これが、オペレッタがきめた「オペレッタ風ウィーン体制」です。道徳的には間違っています。でも、これも、「たとえ話」や「風刺」だと思えばいいのです。夫の浮気を奨励する寛容な奥方が登場するのは、それが真実ではないとしても、オッフェンバックの《パリの生活》のように、夫婦で浮気し放題の風刺オペレッタと同じ、逆説的な手法なのです。

実は、同じようで反対のお話が古代ギリシャの時代にもありました。アテナイとスパルタが戦った「ペロポネソス戦争」があまりにも長くつづくので、両国の女性たちがウンザリして、「お互いにストライキをしましょう」と決めます。戦争が終わるまで、「男たちとは夜一緒に寝ない」と宣言したのです。直ぐに、戦争は終わりました(笑い) ― というのが古代ギリシアの喜劇作家アリストパネスが書いた『女の平和』というお芝居です。ガブリエーレの意見は、ギリシャの「女の平和」ならぬ、ウィーンの「男の平和」なのです。

わざとらしい江戸っ子気質の発露

これでよく分かりました。昔の日本の江戸っ子のように、ウィーン人たちもまた、無粋で、武骨で、真面目で、堅物であるよりも、粋(いき)で、粋(すい)で、陽気で、社交的で、少々の浮気ぽいのが良いのです。それで、伯爵の奥さまのガブリエーレが、奇妙なことに、夫の浮気をあまり気にしないわけが分かりました。なんとまあ、男にとって、いえ、女にとっても、ウィーンはなんて良いところでしょうか。ウィーン会議の関係国がそろって見せた「富国強兵策」のような野暮(やぼ)はご法度(はっと)です。多少、贔屓(ひいき)の引き倒しの感がありますが、これはヨハン・シュトラウスたちがわざと意図的に構えて見せた、これこそ「真の男の天国」です。この風刺を込めたいい加減な粋さ加減が分からないと、このオペレッタは分かりません。でも、それには多少の誤解も生まれます。ウィーンの女性は、どんな女性でも、それゆえ、概して、蓮っ葉で、軽薄な感じがします。偉大なるウィーンの高位の貴族の娘である伯爵の奥方ガブリエーレにも、踊り子と間違われるような雰囲気と気軽さがあるのもその一つです。それで、首相に伯爵の愛人と間違われたのです。

お上(のぼ)りさんをからかう

一方で、劇作家たちは、こう言った軽佻浮薄な人生観に馴染めない真面目な人たちも登場させます。オーストリアの山岳地帯の辺境の国の武骨一辺倒な人たちです。今回は、たと

えば、伯爵や首相たちのような、ロイス＝グライツ・シュライツ国の人たちです。器用な伯爵は、直ぐにウィーン気質に慣れましたが、古風な首相はそうはいきません。頑固一徹、愛人との浮気などは許せません。それで、結局、こういったオペレッタでは、素朴な田舎者が笑いの対象となります。あまりいいことではありません。先に見た、オッフェンバックのオペレッタでも、世界一の先進的な国際都市パリの市民が、世界中から集まってくる、いまだに旧体制型（アンシャンレジューム）を護る国のお上りさんたちをからかってみせるのと同じ趣向です。

賢明で、道徳的な私たちは、、この《ウイーン気質》の物語の舞台が、「ウィーン会議」の当日であることに留意しておいていいでしょう。この会議は、フランス革命とナポレオン戦争終結後のヨーロッパの秩序再建と領土分割を目的とした、その古い政治体制型の全ヨーロッパ各国代表の「欲張りどもの復讐会議」であったのですから。決して、「自由な国民の反省会議」ではありませんでした。

悔い改める伯爵

最後に、伯爵も悔い改めます ―

> ぼくがこんな放蕩者（ほうとうもの:遊び人）になろうとは、誰も予想しなかったろう。
> あっという間にぼくは腕を上げた。今日、永遠の恋に落ちたかと思えば、明日はまた、次の女性が現れる。すべての女性がいとおしい。こんなこともお仕舞いにしよう。
> だが、こんな決心は、だれかに戸を叩かれると道徳など忘れてもう一度だけだと思ってしまう。同じことの繰り返しだ。あの子を探すべきか、深入りすべきか。それとも、妻の元に帰った方がいいだろうか。いや、今日で終わりにして明日から誠実な夫となろう。これが最後の逢い引きだ。思いっきり、楽しもう。この逢い引きのあとは、これっきりにしよう。

おやおや、また、元に戻ってしまいました。相変わらず優柔不断な伯爵です。

武力や流血を避ける

ウィーン会議で、伯爵やガブリエーレよりも賢明な政治家たちは、なにを反省したのでしょうか？　ここで、少々、やっかいですが、私の大好きな中江兆民の論調『仏人民哀れむべし慕（した）うべからず』の冒頭の部分を引用させてください。ここで兆民がいうように、フランス大革命とナポレオン戦争のあとで、西欧世界は、武力と流血の愚を悟ったのです。

> フランス国民が自由権を回復したとき（フランス大革命のとき）、官民はあいせめぎ、にくみあい、仇敵のようになり、ついに国王をとらえて首をさらし、ブルボン家一族をみなごろしにしてしまった。隣国諸王はこれに恐れおののき、同盟を結んでフランスに攻めこむのが五、六国となった。しかし、フランス人はそれでも党派を立てては争いあい、疑いあっては人びとは安心できず、わざわいはひろがり無実の民におよび、流血千里、国中は廃墟になりかけてしまった。その後、隣国の敵を撃退して、やっとこ一時のいつわりの安定を得たのだった。こうしてみると、今日フランス人民がやや自由権を発展させて利益をえている理由も、はじめは頭をくだき、はらわたを破り、血を街にそそいだからだといってもいいだろう。フランスだけではない。イギリス人民が大憲令をつくったのも、アメリカ人が独立をはかったときも、みな剣をとり苦しみもだえ、危険をおかしてのち志をとげたのである。

人間が幸せにはなるためには、官民と国家は、お互いに、信じあい、愛しあい、自由に楽しく遊んで暮らすことが大事であると悟ったのです。仏人民を哀れむことはするが、慕ったりはしないで、愚民政治と言われようが、日々、ウィーン人のように、踊って、飲んで、騒いで、人生を楽しむ ― それでよかったのです。軽薄にみえる「ウイーン気質」の持つ意味は、ここにあります。

ヨハン・シュトラウスがこのオペレッタで、「ウイーン気質」として示したいのは、ウィーン会議において富国強兵をたくらむ各国の思惑をからかって、浮気やお金や階級にとらわれない、すべてに寛容で粋な生き方こそ素晴らしいとするウィーン人の心意気です。

オペラ三つの時代

さて、これでオペレッタ《ウイーン気質》は、めでたしめでたしで、円満に終わりました。でも、ヨハン・シュトラウスは、商売第一の劇場からの依頼だとは言え、「なぜ、このような軽薄とも思える作品を書いたのか？」という疑問は残ります。

私のオペラ鑑賞方の一つに「オペラ三つの時代」というのがあります。詳しくは、私のホームページの「音楽美学入門」の「オペラ三つの時代」をご覧下さい。そこでは、次のように書きました。

オペラを正しく観るときには、いつも、「オペラ三つの時代」について考えておかなければなりません。すなわち、「１　原作の物語の時代」「２　オペラが初演された時代」「３　そのオペラを観ている私たちのいまの時代」の三つです。

１　原作の物語の時代：1815年のウィーン会議の年

これは、「原作の物語の時代」です。このヨハン・シュトラウスの《ウイーン気質》が舞台になった時代は、はっきりしています。1815 年のウィーンの「平和会議」（？）のときです。

２　オペラが初演された時代：１８９９年の世紀末

そして、このオペレッタが初演された時代もはっきりしています。1899 年で 19 世紀の世紀末です。二つ年が明ければ、二つの世界戦争が始まる新世紀です。まさに、戦争前夜です。

３　オペラを観ている私たちの今の時代：２０２４年の戦乱の年

これも、はっきりしています。2024 年の猛暑のときです。

オペラ三つ時代が一つに合わさった現代

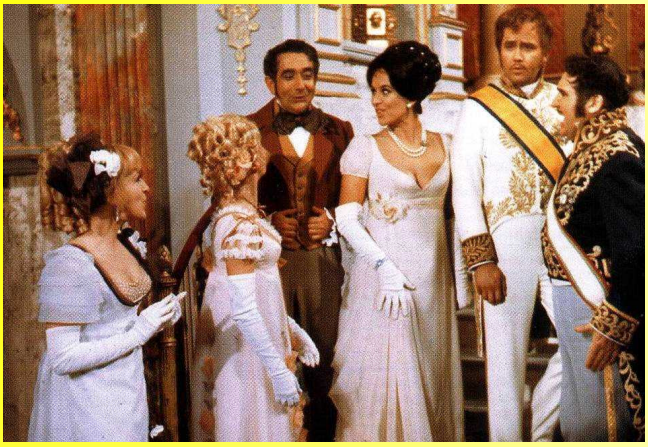
現代もまた、あきらかに戦争の時代です。舞台となったウィーン会議と同じ状況にあります。二つの大きな侵略戦争のさなかです。ロシアがウクライナを攻め、イスラエルがパレスチナを攻めている真っ最中です。国連が講和を計る「似而非(えせ:本物のように見えるニセの) ウィーン会議」を開いていますが、いっかな納まりがつかず、やはり、みんなで踊っているばかりです。世界は、ナポレオンならぬ、ロシアの首相とイスラエルの首相に対する憎悪と復讐の感情であふれています。国連では、ロシアとイスラエルに身方する国もあり、世界の多くの国の国民が期待した自由と民族解放の憧れを押しつぶし、民族のナショナリズム(国家独立)への動きを阻止するものでした。多くの国家がまた、第２次世界大戦の古い独裁政権に戻ったのは２１世紀前半のヨーロッパの趨勢(すうせい)でした ― などとこのオペレッタの解説文のコピーを「オペラ三つの時代」に合わせて、少し書き換えるだけですみます。

それで、「なぜ、ヨハン・シュトラウスがこの《ウイーン気質》というオペレッタを書いたのか？」の答は、「これまで、誤解と嫉妬と裏切りとあきらめに明け暮れた全員が、一堂に集まって、仲良く、ご機嫌で、手を取り合ってワルツを踊り、改めて、お互いの生き方を理解し､信頼し、大切にするウィーン人の血を、ウイーン気質を、讃えるためです」となります。ヨハン・シュトラウスは、ギリシャ時代の「女の平和」ならぬ、今の第３の時代の「男の平和」を書いたのです。それで、今日、みんなでご一緒に、このオペレッタを観ているのです。

舞台芸術としてのオペラ、オペレッタ

オペラも、オペレッタも、「舞台芸術」です。斎藤秀三郎の『熟語本位の英和中辞典』の捕逸の "stage" の項に**「【他動】②たくらむ．企（くわだ）てる。stage a Riot 騒乱を企てる」**とあります。ステージの上から、いろいろな歌手たちが、客席にむかって、自由に、大声で、装飾して、公然と自説を述べるのを許すのは、これも「舞台芸術」（英: performing arts ）のオペラとオペレッタの宿命です ― と書きましたら､驚いたことに、今朝 2024/07/24 の朝日新聞の朝刊に客員論説委員が「トランプ氏暗殺未遂事件」について書いたコラムに､「今回の事件を通じてトランプ氏は大統領選挙戦において有利になったとも言われている。そのためか、Ｘなどでは､『演出された＝やらせ』を意味する『＃staged』というハッシュタグが一気に増えた」と出ていました。

【2024/07/24　都築正道】



❀ ホームページ編集者による「まとめ」

いま、ＮＨＫの春期の木曜講座Ｂで、「オペレッタ特集」を組んでいます。まず、パリのオッフェンバックの「オペラ・ブフ」から始まりました。彼の作品は風刺が効いた物語、皮肉な会話、軽妙な歌、親しみやすい音楽が特徴で、華やかなバレーや技巧的なダンスも見どころです。
次に、ウィーンのヨハン・シュトラウスのオペレッタに進みました。特に《ジプシー男爵》と《ウイーン気質》が取り上げられました。《ウイーン気質》は、ウィーン会議を背景にした歴史物で、時事的な批判も含まれています。
《ウイーン気質》の物語は、プロイセンの小国の伯爵バルドウインが、ウィーンの大貴族の娘ガブリエーレと政略結婚し、ウィーンの浮気文化に染まっていく過程を描いています。ガブリエーレは夫に浮気を奨励し、伯爵は次第に陽気で粋なウィーン子に変わっていきます。
このオペレッタは、ウィーン人の心意気を称賛し、富国強兵をからかい、浮気に寛容で階級にとらわれない生き方を賛美しています。シュトラウスの死後、未完のまま残された《ウイーン気質》は、ミュラーによって完成され、カール劇場で初演されましたが、再演後に爆発的な人気を博しました。
ガブリエーレの意見は、ギリシャの「女の平和」ならぬ、ウィーンの「男の平和」と言えます。ウィーン人たちは、昔の日本の江戸っ子のように、無粋で真面目で堅物であるよりも、粋で陽気で社交的であることを好みます。ガブリエーレが夫の浮気を気にしないのも、この文化的背景によるものです。
ウィーン会議の関係国が示した「富国強兵策」は、ウィーンでは野暮とされ、シュトラウスたちはこれを風刺しました。ウィーンの女性は軽薄に見えることもありますが、これはウィーンの文化の一部です。シュトラウスは、この作品を通じて、ウィーン人の心意気を示しました。このオペレッタは、ウィーンの文化と精神を象徴するものであり、時代を超えて楽しめる内容となっています。　以上